

---

# 少女時代

紀ノ川

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

少女時代

### 【Nコード】

N31390

### 【作者名】

紀ノ川

### 【あらすじ】

貞子とお岩という名前の小学6年生の少女が居た。そんなふたりの前に恋音という名前の美しい少女が現れ……。..  
「ムーンライトノベルズ」に掲載した「少女時代 18禁 version」のORIGINAL VERSIONです！

## 第1回 小学校

その小学校には、中学校に進むと、上級生からリンチされるといふ言い伝えがあった。それは昔からのしきたりで、放課後、学校の何処かに一人ずつ呼び出され上級生からリンチされるのだという。リンチを怖がって親や先生にチクったりしたら一人前と見なされない。通過儀礼として潔く受けて立つてこそ一人前と仲間から認められるのだ。

そんな噂話を卒業を間近に控えた6年生達はひそひそと話していた。「怖いよねー」と諦めながらもどこか楽しげにひそひそと話していた。まるで怪談を「怖い！怖い！」と言いながらも楽しんで聞く様に。

その小学校に、貞子とお岩という名前のふたりの6年生の少女が居た。名前が原因で貞子とお岩がどれだけ悩んできたか、どれだけいじめに苦しんできたか、ここでは敢えて書かない。読者の皆さんのご想像にお任せする。そして貞子とお岩は自殺を決意する。これまでどれだけ苦しんできたか、これからどれだけいじめを受けなければならぬか？その事を考えると貞子とお岩にとって自殺は当然の帰結であった。

貞子とお岩はふたりで天国で幸せに暮らしたいと願った。いじめも宿題もテストもなく、おやつが食べ放題の天国で幸せに暮らしたいと願った。

ちなみに、貞子とお岩も名付け親は祖父母だった。おじいちゃんとおばあちゃんを恨む気持ちにはなれなかったが、その名を容認した親を恨みに恨んだ。

貞子とお岩にとってクラスメイトは、脇役その他大勢に過ぎなか

った。名前を覚える価値もない連中だった。名前を覚える必要がある時は、脇役その1、脇役その2、脇役その3、と命名して識別していた。

担任の教師から見ると、貞子とお岩はいじめられているというよりも、周囲をいじめているように見えた。

担任の教師にはこのいじめの問題はそれほど深刻とは思われなかった。何故なら貞子とお岩がいじめに遭う理由がはっきりわかっているからだ。名前だ。確かに可哀相な名前だとは思うが、子供の不幸を願って変な名前を付ける親など世界中どこを捜してもいない。要は名前の使い方なのだ。その名前を明るく正しい方向に使う方法さえ学べば、いじめなんてなくなり、貞子とお岩はクラスのみんなと仲良くやってゆけると思っていた。

だが貞子とお岩は親から授かった名前を暗く悪い方向に使っていた。

幾ら外の世界には美しい事や楽しい事が沢山あると言っても、貞子とお岩は頑なに名前という暗いジメジメした穴を覗き込んだままなのだ。自分達の世界に閉じこもったまま出てこないのだ。

そうやって、閉じこもったまま外の世界と戦わずに生きるのは楽な生き方だよな。とさえ担任の教師には思われた。

（次回に続く 最終更新日11年03月06日）

## 第2回 貞子とお岩

お岩は玄関の脇に蝉の抜け殻がふたつ並べて置いてあるのに気付いた。

「？」

今日は2学期の始業式だ。9月1日だ。夏休み中ならともかく、何故今日蝉の抜け殻がふたつ並べて置いてあるのかお岩には理解出来なかった。一体誰が置いたのだろうか？先に登校したお兄ちゃんが置いたのだろうか？いや、お兄ちゃんは今うこんなガキっぽいものには目もくれない。

蝉の抜け殻はお岩に幼年時代を思い起こさせた。子供の頃はお兄ちゃんとふたりでこんなものを必死になつて集めたよな。あの頃がなつかしいよ。だけど今日は9月1日だぜ？

その蝉の抜け殻はお岩に数年前の秋の運動会も思い起こさせた。地球温暖化で9月になつても猛暑日が続いていたが、学校は決まり事だからと、運動会を決行したのだ。

その結果、50人以上の生徒が体調不良を訴え、10人以上の生徒が救急車で病院に運び込まれた。不本意ながらお岩もその中に含まれていた。脇役その他大勢と一緒にされるのも屈辱だったし、あの熱中症の辛さは忘れられるものではない。マジで辛かったんだから！馬鹿な大人達が地球を温かく暖めたおかげで私が苦勞するんだから！

お岩がいつまでも蝉の抜け殻を見つめたまま動かないので、近所に住む貞子の方からお岩に近付いてきて声をかけた。

「もうかってまっか」

「ぼちぼちでんな」

貞子とお岩のいつもの挨拶だ。

「学校遅れるよ。何見てるの？」

「セミの抜け殻」

「ふたつあるね」

「うん」

「・・・・・・・・」

貞子にはお岩が何故そんなに蝉の抜け殻に心を奪われているのか理解出来なかった。

貞子とお岩が学校へと歩きはじめると、近所のアパートに住むおたく青年が物陰から貞子の写真を撮りはじめた。

一体何年生の頃からだろう？気付いた時にはそのおたく青年は、貞子の登下校の時間に合わせて、物陰から貞子の写真を撮っていた。お岩も気付いているが何も言わない。そのおたく青年の存在は貞子とお岩にとっては暗黙の了解だった。

おたく青年は太っていて背が低く眼鏡をかけていて色白だった。アニメの美少女がプリントされたＴシャツにジーンズという格好をしている。Ｔシャツの裾を全部ジーンズに突っ込んでいるのがポイントだ。カメラはプロ顔負けの機材を持っている。仕事はしていないと貞子の母親が噂しているのを聞いた事がある。無職・ニートというやつだ。

変態に間違いないが、近付いて来る訳でもなく、何年もの間、ただ物陰から貞子の写真を撮っているだけだ。実害は何もない。なので貞子も何も言わない。一応ご近所さんなので大人の付き合いってやつもあるだろうし、下手に騒いで警察沙汰にすると、逆恨みされて一家皆殺しのバラバラ死体にされるのではないかと貞子は思っていた。

「アニメや漫画に出てくる、古き良き近所のお兄ちゃんが、今じゃストーカーだもんね」今の世の中の大人なんて、みんなそんなものだよね」と貞子は思っただけだった。

貞子は色白で丸顔のぼっちゃりしたとしたかわいい感じの女の子だ。髪はショートヘアにしている。髪を伸ばしたら、何を言われる

か、どんな目に遭うか、わかっていた。そして一人っ子で兄妹は居ない。

お岩は色黒で目付きが鋭い。アゴも引き締まっっていてシャープだ。髪は長く伸ばしている。

もつとも、目付きが鋭いと言えば聞こえはいいが、要は目付きが悪いのだ。お岩はその事で散々悩んできたし、街ですれ違った同年代の女の子からやたらとにらまれる事が多かった。

お岩にはお兄ちゃんが居てる。武という普通の名前だ。武之助などという名前ではない。

中学2年生でサッカー部のレギュラーの武は、お岩と同じ様に目付きが悪かったがイケメンだった。目付きが悪いのも「鋭い目付きをしている！カッコイイ！」と女の子からウケがよかった。お岩も男に生まれればよかったと思った。

そんな貞子とお岩の前に恋音が現れる。

（次回に続く 最終更新日11年03月06日）

### 第3回 転校生

9月1日の2学期の始業式の朝、とんでもない美少女の転校生を前にしてクラス中が静まり返っていた。クラス中を圧倒する美しさだ。

日本画の中から抜け出して来た様な、古風な顔立ちの美少女は、「姫恋音（れのん）です。東京から引っ越して来ました。よろしくお願いします」

退かぬ！媚びぬ！省みぬ！といった凜とした強さを感じさせる声で挨拶をした。

「恋音だつて」貞子と言う。

「姫だつて」お岩が言う。

「姫恋音だつて」貞子とお岩が同時に言う。貞子とお岩は声を出さずに爆笑した。

「もう、人生勝ち組って感じだよね」貞子とお岩はまた声を出さずに爆笑した。

恋音がふんわりとした笑顔を浮かべながら貞子とお岩を見た。

「貞子とお岩つて、とても素敵な名前だと思うよ」そう言いながら休み時間に、恋音が貞子とお岩に話しかけてきた。

クラス中が静まり返り、息を飲んで成り行きを見守った。

「おいおい、いきなり直球ストレートかよ」と貞子とお岩は思いながらも、東京から引っ越して来た弥勒菩薩の様な美少女に話しかけられて、内心は嬉しかった。

「姫さんつて、KYだよな」と脇役その他大勢がクスクス冷笑した。少なくとも貞子とお岩に話し掛けようという物好きは、脇役その他大勢には居ない。だが恋音はそんな事には一切お構いなしだった。



「私が子供の頃に死んだママがジョン・レノンのファンでね。ビートルズのメンバーだったジョン・レノンよ。だけどCDを全部聴いたけど、私はジョン・レノンよりエリック・クラプトンの方が好きだな」

「エリック・クラプトンのCD持ってるの？」お岩が訊く。

「うん。全部持ってるよ」

「えりつく・くらぶとんって何？」貞子が訊く。

「イギリスのブルースマンよ」

「うちのお兄ちゃんが最近エリック・クラプトンにはまっているんだよね」

「よかつたら、CD貸してあげるよ」

「本当?! 全くうちのお兄ちゃんにも困ったもんだよ。最近すっかり色気づいちゃってさ。エリック・クラプトンが渋い! なんて言い出してさ! こないだまでAKBと一緒に聴いていたのにさ!」

「お岩のお兄ちゃんって、カッコイイんだよ」貞子が言う。

「外面がいいだけだよ。家じゃ近頃部屋に閉じこもったまま出て来ないんだよ? 信じられる? 最近すっかり無口になっちゃってさ! 厨二病ってやつかな」

「それはちよつと違うでしょう」と貞子が笑い、恋音もふんわりと笑いながら「お兄さんは中学2年生なの? 私は一人っ子だから兄妹に憧れるな」と言った。

「うちも! うちも! 憧れるよね」と貞子が叫んだ。

「ねえねえ、東京で有名人に会った事ある?」貞子が訊く。

「アントニオ猪木さんなら見かけた事があるわ」

「アントニオ猪木ねえ……ジャニーズを期待してたんだけど……アントニオ猪木ねえ……」

「知ってた? アントニオ猪木さんって日本には住んでいないらしいの。外国に住んでいるんですって。だから日本じゃ滅多に会えない

らしいのよ」

貞子とお岩が「ふ〜ん」と思っていると、恋音は突然姿勢を正すと真剣な表情で「鈴木さん、田中さん、私とお友達になってね」と言った。

貞子とお岩は感動した。貞子とお岩は日頃から脇役その他大勢との、神経を擦り減らす心理戦に明け暮れていた。そんな貞子とお岩にとって、目の前の恋音の素直さは、忘れかけていた大切な何かを思い出させるものだった。

恋音はその時から貞子とお岩の友達になった。脇役その他大勢とは違う、名前を覚えるだけの価値がある友達になった。

（次回に続く 最終更新日11年03月04日）

## 第4回 エリック・クラブトン

貞子とお岩は「なんて大きな家なんだろう」と驚いていた。玄関だけで貞子とお岩の部屋くらいの大きさがあるのだ。

貞子とお岩は恋音の家に招待された。

恋音は応接間に招き入れると、ケーキとお茶を運んできた。

貞子とお岩はケーキとお茶の美味しさに感動した。

それから恋音の部屋に移り、恋音のお気に入りだというCDを聴かせてもらった。

恋音の部屋はシンプルな部屋だった。大人の部屋って感じ？目を引く物といえばパソコンぐらいしかない。

恋音が銀色に光る高級そうなオーディオにCDをセットすると、アコースティック・ギターの音色が流れてきた。

「はじめてエリック・クラブトンを聴くなら、この「アンプラグド」がおすすめよ」恋音が言う。

貞子のはじめて聴く洋楽に目を白黒させていた。

お岩はお兄ちゃんが聴いているのを聴いた事があつたが、なんて退屈で眠たくなる音楽だろうと思った。お兄ちゃんが何故こんな退屈で眠たくなる音楽に夢中になっているのか理解出来なかったが、目の前に居る恋音は真剣な表情をして、スピーカーから流れる音楽に意識を集中していた。

お岩は段々まぶたが重たくなってきたが「寝ちゃいけない！寝ちゃいけない！」と思い、隣の貞子を見ると、貞子はコクリコクリと舟を漕いでいた。お岩は足で突いて貞子を起こしたが、貞子は慌てて「あ！エリック・プランクトンはいいいね！」などと訳の分からぬ事を口走っている。恋音はふんわりと笑っただけだった。

「ビートルズのジョン・レノンも嫌いじゃないけどね、エリック・

クラブトンの方が不確定要素が強くて好きなの」と恋音は言った。  
「ふかくていようそがつよい？」貞子とお岩は思わず顔を見合わせた。何それおいしいの？

貞子とお岩はビートルズと言われても、音楽の教科書に載っていた「イエスタデイ」しか知らないから黙り込むばかりだった。

「あ、我が家の一員を紹介するわね」恋音はそう言っただけで部屋を出て行った。そして猫を連れて来た。

「この猫は私が生まれた時から生きている、おばあちゃん猫のクロ」「へへ長生きなんだ」

「うん。もう20年以上生きているって健一が言ってた」

「健一？」貞子とお岩が同時に訊く。

「パパの事よ」

「ふん」

クロは恋音の腕の中からもがいて飛び出すと、貞子とお岩に目もくれずにドアに向ってのろのろと歩いて行った。

「もう、ちゃんとご挨拶してよ」恋音がそう言いながらドアを開けてやると、クロは「ニャア」とだけ鳴いて出て行ってしまった。

「あの猫、いつも健一の部屋のベッドで寝てばかりいるのよ。私も生まれ変わったら猫になりたいな」恋音が言った。

「健一と私は境遇が似ているの。健一も中学生の時にママが死んだんだって。そう、私のグランマね」

「恋音のお母さんは死んじゃったんだよね？」貞子が神妙に訊く。

「うん。私が子供の頃にね」

「料理とか洗濯とか掃除はどうしているの？」お岩が遠慮がちに訊く。

「全部私がやっているわよ」

「すご〜い！」貞子とお岩が同時に感嘆の声を上げた。

「だって他にやってくれる人が居ないから。仕方なく。ね？」

貞子とお岩は完璧超人って実在するんだなーと思った。恋音が転校してきて間もなくわかったのだが、恋音は勉強でもクラスで一番だった。

帰り際に恋音は「お土産よ」と言っ、貞子とお岩にケーキを持たせてくれた。帰り道に貞子とお岩は「恋音っ、いい子だね〜」「いい子だね〜」と意見が一致し、ケーキに釣られて現金に笑った。

（次回に続く 最終更新日11年03月06日）

## 第5回 切り裂く

10月のある日の昼休み、貞子とお岩は教科書がなくなっている事に気付いた。「また、いじめかよ!」と思っていると、午前中で授業が終わりの低学年の女の子達が、焼却炉で見付けたと言って、貞子とお岩の教科書を教室までこっそりと持って来てくれた。こんな低学年の女の子達でさえ、そこには先生には言わない方がいいという何かを感じ取っていた。

貞子とお岩の教科書はズタズタに切り裂かれていた。さすがの貞子とお岩もショックを受けた。今までも教科書を隠された事は何度もあったが、こんなひどい事ははじめてだった。勿論犯人は脇役その他大勢に決まっている。おそらく貞子とお岩に新しい友達が出来たので「調子にのるなよ!」というメッセージなのであろう。そしてそれは転校生の恋音への無言の警告でもあるはずだ。

脇役その他大勢は普段から「貞子とお岩って怖いよね」なんかこう、後ろからいきなり刺されそうな感じ?」「わかる!わかる!無言で刺されそうだね」などと言って爆笑していたが、実際にこうやって教科書を刺したのは、お前ら脇役その他大勢の方じゃないか!と貞子とお岩は激しい怒りを感じた。

貞子とお岩に気を使ってか、恋音がおずおずと「ひどい事をする人もいるのね」と話しかけてきた。

「うんうん、うちら慣れっこだし」と貞子が言う。

「先生に相談した方がいいんじゃない?」と恋音が不安気に言う。

「相談するだけ無駄」とお岩。

「脇役その他大勢はうそ泣きの天才だし」と貞子。

「うちらが、教科書を失くしました。と言って、先生と親から怒られれば済む話だし」とお岩。

「姫さんもあんまりうちに近付かない方がいいよ。同じ事される

よ？」と貞子。

「そんな・・・・・・・・」と言つて言葉を失う恋音。

それにしても、教科書の切り口の鋭さからわかるが、それは手で破られたものではない。ハサミで切られたものでもない。何か鋭利な刃物で執念深く執拗に切り裂かれていた。そしてその教科書は何か病的なものを貞子とお岩に感じさせた。

「確実に精神を病んでいる」

その日は10月だというのに真夏の様な暑さだった。午後からの体育の授業中に恋音が倒れて保健室に運び込まれた。

お岩は熱中症かと思い、恋音に親身になって付き添った。

保健の先生は「ただの貧血だから放課後まで休んでれば治るわよ」と言った。

貞子は放課後になると、恋音が保健室からそのまま家に帰れるようにと、恋音の荷物をまとめて持つて行こうとした。

貞子が恋音の荷物を手にした時、服から何かが滑り落ちた。硬い音を立てて床に転がったものは折り畳み式のナイフだった。柄の部分に美しい彫刻が施されている。「なんで？学校にこんな物持つて来ちゃいけないのに・・・・・・・・なんで？」貞子の頭に切り裂かれた教科書が浮かんだ。「まさか・・・・・・・・恋音が？・・・・・・・・まさか」貞子の頭の中が真っ白になった。

担任の教師は、貞子に恋音を家まで送るようにと言い、お岩には話があるから職員室まで来るようにと言った。

家路につく恋音と貞子。前を歩く恋音はまだ気分が悪いのか無口だ。後ろを歩く貞子もさつき手にした、折り畳み式のナイフの重みが心にのしかかって無口だ。いつもと変わらないのはおたく青年だ

けだ。

恋音の家の前まで来て、貞子がほっと安堵した時に、「ねえ、見たんでしょ？」と恋音が背中越しに訊いた。

貞子は心臓が口から飛び出すかと思ったが、平静を装いつつ不自然な笑顔まで浮かべながら「な、何を？」とぼけて言った。

「これよ！」

そう言つて振り返つた恋音が差し出した右手の平には、折り畳み式のナイフが乗っていた。

絶句する貞子。

目をギラギラとナイフのように光らせながら恋音が言つた。

「そうよ！私がやったのよ！」

「なんで………」

「あんた達の教科書、おもしろいようによく切れたわよ」

「なんで………そんな事するの？」

「教えてあげましょうか？私はね、あんた達が、」

「やめて！聞きたくない！」

「あら、だめよ。人の話は最後まで聞かなくちゃね？私はあんた達がね、」

「やめて……！」

貞子の叫びが暗闇を切り裂いた。貞子は自分の声に驚いてベッドの上に飛び起きた。周りは暗闇だ。「なんだ、夢か？」貞子は安堵した。

確かに貞子は恋音を家の前まで送つて行つた。恋音は「今日は心配かけてごめんね。送ってくれてありがとう」とだけ言つて家の中へ入って行つた。折り畳み式のナイフの話など一言も出てこなかった。

「うちってイヤな子だ」

こんな夢を見るのは恋音を疑っている証拠だ。ああいう柄の部分に美しい彫刻が施された折り畳み式のナイフを持ち歩くのが、東京では流行っているのだらう。アンティーク趣味というか、レトロ趣味



味というか、骨董品趣味というか、お守りなのかもしれない。恋音はうちらみたい田舎のイモとは違う。東京から来たイケてる女の子だもん、きつとそうだよな。

・・・でも・・・でも・・・

お岩に相談してみようかと思う。でもお岩の性格なら情け容赦なく恋音を締め上げて白状させるだろう。だめだ！お岩には相談出来ない！折角出来た新しい友達を失う事になる。

ん？

白状？

恋音が一体何を白状しなければならぬというのだろうか？

「やっぱり、うちってイヤな子だ」

貞子はこれじゃとても朝まで眠れないと思った。

貞子の寝言で両親が飛び起きたのではないかと思っただが、家の中は静まり返ったままだった。両親はぐっすり眠っているらしい。あの親は自分達の事しか考えていないし、子供が悪夢にうなされても心配なんかしないよな。と貞子は思った。

それにしても、朝まで眠れないなんて大人みたい！うちも大人の仲間入りかな？などと思っているうちに貞子はまた眠りにやさしく包み込まれていった。貞子の健康な体は眠りを求めていたし、眠れぬ夜を抱え込むには貞子はまだ幼過ぎた。「今しばらくは楽しい夢を！」と月がささやいた。

（次回に続く 最終更新日11年04月21日）

## 第6回 貞子とおたく青年

恋音は体育の授業中に倒れた日以後数日学校を休んでいる。放課後、校舎を出て校門へと歩きながらお岩は「恋音、大丈夫かな？　ねえ、お見舞いに行こうよ？」と言った。貞子は「う、うん」と答えるものの曖昧だ。

お岩は「教科書の事で親に怒られた？」と訊いた。貞子は「う、うん」と答えるもののやっぱり曖昧だ。

ここ数日貞子はぼんやりしている。まるで恋音が休んでいる事と関係があるかのように。

お岩が「もう！はつきりしなさいよ！」と冗談で怒っていると、校門で待ち伏せしていたらしき女子中学生数人が「田中武君の妹さん？」とお岩に話し掛けて来た。

「そうです・・・」とお岩が答えると「やっぱり！」「そうだと思った！」「武君にそっくり！」とキャーキャー騒ぎ出した。そして貞子をそっちのけにして、お岩を取り囲んで「武君って、家ではどんな感じ？」と質問責めにした。

独り置いてきぼりにされた貞子が「お岩のお兄ちゃんはいケメンだから人気があるんだな」それにしても、お岩のあの顔！さっきまで怒ってたのに、もうよそ行きの顔になってる。これだから女は怖いな」などとぼんやり思いながら立ち尽くしていると、妙案が浮かんだ。

「こちらからおたく青年に話し掛けてやろう」

おたく青年が予期していなかった女子中学生数人の登場に視界を遮られて、貞子の姿を見失いオロオロキョロキョロしていると、突然貞子がおたく青年の後ろから現れた。

おたく青年は完全にフリーズした。その反応を見て貞子は「これ

なら勝てる！」と思った。

「ねえ、うちをさがしているの？うちを盗撮していたんでしょ？」

おたく青年は貞子の詰問から逃れるように背を向けながら鼻息を荒くして黙り込むばかり。

「ねえ、何か言いなさいよ？」

「・・・ぶ・・・ぶひ・・・」

おたく青年は必死に何かを言おうとしているのだが、鼻息が荒くなるばかりで、貞子には「ぶひ」としか聞き取れない。

「ねえ、おたくの部屋に連れて行ってよ？」

「ぶ？ぶひ？！」

貞子は強気な性格ではない。強気な性格なのはお岩の方だ。だが、このおたく青年を目の前に行っていると、おもいつきいいじめたくなるような、サドな気持ちに襲われた。

「行くわよ！案内しなさい！」

「ぶ？ぶひ？！」

「そら、何やってんの？早くしなさい！」

「ぶ・・・ぶひ・・・」

おたく青年は観念したようだ。

おたく青年の部屋はアニメのフィギュア、ポスター、ブルーレイ、マンガで一杯だった。

パソコンもデスクトップやらノートパソコンやらネットブックやらと一杯ある。

だが汚くはない。物が多いだけで、きちんと整理整頓されている。貞子やお岩のようなゴミ部屋とは違う。

貞子がホコリ一つかぶらず、美麗にディスプレイされたフィギュアの数々を「すごい」と眺めている間、居心地悪そうに部屋の隅に突っ立っていたおたく青年だったが、貞子に「ここはおたくの部屋でしょ？もつと堂々としなさいよ！」と言われると、しばらくは

ウジウジしていたが、突然何かを思い付いたのか、台所の方へと飛んで行った。

「なんだかな〜」と思いながら貞子がフィギュアの数々を眺めていると、両腕一杯にスナック菓子を抱えて、おたく青年が戻ってきた。  
「ぶ、ぶひ！」  
「？」

おたく青年はスナック菓子の山を貞子に差し出す。

「これ食べていいの？」

「ぶひ！ぶひ！」

おたく青年はさかんにうなづく。

貞子はおもわず笑った。

貞子の両親は共働きで仲が悪かった。いつもケンカばかりしていた。貞子から見たら、離婚するかどうかの瀬戸際だった。貞子にとつては食事の時間に、家族3人が顔を合わせる事が最大の苦痛だった。勿論貞子はその家には帰りたくなかった。

そうやっていつしか貞子はおたく青年の部屋に出入りするようになった。

おたく青年の部屋にはスナック菓子と炭酸飲料とインスタントカップ麺が沢山有り、食べ放題・飲み放題だった。貞子はマンガを読んで、お腹が空いたら、ポットからお湯を注いでインスタントカップ麺を食べた。

貞子が不思議に思ったのは、おたく青年は登下校中の貞子をあれだけ熱心に何年も追い掛けていたのに、いざ貞子が自分の部屋に来る様になると、貞子をほったらかしで、自分はすっかりパソコンに夢中になってしまう事だ。貞子の事などまるで忘れてしまったかの様に。

パソコンで何をしているのかは知らないが、特筆すべきはそのタイピングの早さだ。おたく青年の鈍重な見た目とは裏腹に、キーボ

ードを一切見ずに画面だけを見て、猛烈な早さで指が動いている。そして画面に向って「ぶひ！ぶひ！」と時折叫んでいる。

一度、貞子が後ろからコッソリと画面を覗き見たが、画面にはアニメの美少女の画像と「ネ申降臨！」「キタキタキタキタ

（。。。。。）「！！」「通報し

ますた」「自作自演乙」「幼女萌え（\*ゝゝ）ハアハア」などの文字が並んでいて、貞子は頭が痛くなったので、パソコンについてはそれ以上関わらない事にした。

（へ） ヤレヤレ・・・

（次回に続く 最終更新日11年06月11日）

## 第7回 心の闇

11月のある日、お岩はオナニーをしていた。悪い事だとは思わなかった。ただ、終わると猛烈な倦怠感と眠気に襲われた。その耐え難い眠気の中でお岩は夢を見た。お兄ちゃんが警察に捕まる夢だ。お兄ちゃんを連れて行こうとする警察官に、お岩はお兄ちゃんがいかに無罪かを雄弁に話す。お岩の説得が功を奏して、お兄ちゃんは許されお岩の元へと戻って来る。お岩は自分の雄弁さとお兄ちゃんを取り戻した事に大きな満足を感じる。だが、夢から覚めると、何故お兄ちゃんが警察に捕まったのか？自分が何をそんなに雄弁に話したのか？全く思い出せなかった。

そんな時に、恋音がエリック・クラプトンのCDと手作りのケーキを持って遊びに来た。

「エリック・クラプトンはビートルズのギタリストで親友だったジョージ・ハリスンの奥さんに恋をしちゃうのね。その奥さんの為に」としのレイラ」っていう素敵な曲も書いたの」

「こないだ貸してくれたやつだよな？」

「そう。今でもコンサートじゃ必ず演奏する名曲よ」

「うん、うん」

「だけど親友の奥さんに許されぬ恋をした苦しみから薬物中毒になつて、廃人同然の生活を2年か3年送るのね」

「えー悲惨！」

「そうね。だけどなんとか立ち直って録音した作品が、今日持ってきた「461オーシャン・ブルーヴァード」なの。この感動的な名作でエリック・クラプトンはまたロックの世界の第一線に返り咲いたの」

「へー」

「だけど今度はアルコール中毒になっちゃってね」

「えーまじ？」

「うん。今でもエリック・クラプトンはアルコール中毒患者救済の  
為のチャリティ・コンサートを開いているのよ。」「クロスロード・  
ギター・フェスティバル」っていうんだけど」

「でもなんか、かなり問題あるよね？」

「そうね。でもだからこそエリック・クラプトンのブルースは味があるのよ」

「味ねえ」

「そう。味」

「そっかーちよつとトイレ」

お岩は「姫恋音のサルでもわかるエリック・クラプトン講座！」  
を受講していた。相変わらずエリック・クラプトンを聴いても、退  
屈で眠たくなる音楽だとしか感じられなかったが、お兄ちゃんの武  
に置いて行かれるのが嫌だった。お兄ちゃんの武とは常に同じレベ  
ルに居たいと願っていた。

「ねえ、このボタンをお岩に押して欲しいの」

お岩がトイレから戻ってくると、恋音がお岩にケータイを手渡し  
た。恋音のケータイは貞子やお岩の持っているようなガキ用のケー  
タイではなく、本格的なインターネットも出来るスマートフォンだ。  
「画面に表示されている、書き込むボタンを押して欲しいの」

ズシリと重い恋音のケータイの画面には、どこから入手したのか、  
貞子の写真と「12月24日の午後6時にXXXX公園で、この鈴  
木貞子をレイプして下さい！」と本文が書かれていた。そしてその  
本文の下に、書き込むボタンが表示されている。

お岩は思わず恋音の顔を見た。心臓がドキドキした。恋音の息を  
飲むような美しさのせいだろうか？

「貞子を脅るかすのよ」

お岩は絶句した。何と言えればいいのか、言葉が出て来ない。

「貞子が私にだけって言ったんだけどね、」

「な、何？」お岩はようやく言葉を絞り出した。

「お岩はお兄ちゃんとやりたがっている変態だ！て」

お岩は力ツ！と頭に血が登った。

お兄ちゃんをおかずにして何が悪い？！私のお兄ちゃんだよな？！想像するだけなら自由だよな？！日本は民主主義だよな？！

「お岩の事をそんな風に言うなんて許せないよね」

いかにも男の部屋に出入りしている女の言いそうな事だとお岩は思った。と同時に、これが東京のやり方なのかとも思った。許せない奴はインターネットの掲示板に書き込む。これが東京のやり方なのかと。

「お岩はこの書き込むボタンを押しさえすればいいのよ」

お岩はケータイに表示されている貞子の写真をじつと見つめた。

最近貞子は親が共働きなのをいいことに、おたく青年の部屋にコソコソと入り浸っている。私が知らないでも思っているのだろうか？一体何をしているのやら！変態はどっちだ？男になら誰にでも股を開くビッチめ！インターネットで見知らぬ誰かにレイプされるのがお似合いだ！貞子なら喜んで腰を振るかもしれない！

私の家に遊びに来た時も、お兄ちゃんに色目を使っている事もちゃんと知っているんだから！！！！

・・・・・・・・・・だけど・・・・・・・・・・だけど・・・・・・・・・・

恋音がお岩に顔を近付け、目を覗き込んだ。お岩の目という井戸の底を恋音は覗き込んだ。その井戸の底にはお岩の心があった。そしてその心はお岩の目の形をしていた。

恋音が言った。

「ねえ、今日私に来る前に、ひとりでしたたでしょ？」

「え！な、何を？」赤面しながらお岩が言う。

「私もするから、わかるわよ」恋音がふんわりと笑いながら続ける。

「このケータイは私のだから、警察にバレたとしても捕まるのは私。ケータイにはIPアドレスという番号が付いているから、お岩には



絶対に迷惑は掛からないわ」

お岩はケータイに表示されている貞子の写真をもう一度じつと見つめた。

貞子さえいなければ漫才師みたいなコンビを組まされる事もなかった。貞子なんかより私の名前の方がまだマシなんだから！

貞子も私に対して同じ事を思っているにちがいない！でなければ、あんなキモイおたく青年と仲良くなかったりしない！

あのおたく青年は貞子ばかり撮っていた！私が一人で登下校している時などは、貞子と一緒にじゃない事に、露骨に残念そうな様子をしていた！

貞子なんかより私の方がキレイなのに！！！！

・・・・・・・・貞子さえいなければ・・・・・・・・貞子さえいなければ・・・・・・・・

「そうよ、それでいいのよ」恋音がお岩の髪をやさしく撫でながら耳元で囁く。「お岩は今までずっと我慢してきたんだもの。誰よりも、誰よりも、ずっと、ずっと、我慢してきたんだもの。インターネットに書き込む位の権利は十分あるわよ」

お岩は突然さっきの猛烈な倦怠感と眠気に襲われた。その耐え難い眠気の中で、さっきの夢の中で何故お兄ちゃんが警察に捕まったのか？その理由を思い出した。そして自分がまだ警察官に言わなければならぬ事がある事に気付いた。早く夢の中に戻らなくちゃ！警察の人が行ってしまおう！早く眠らないと！

お岩の指が書き込むボタンに伸びる。

その時、隣の部屋から大きな物音がした。お岩はハッ！と我に返った。お兄ちゃんの武が部活から帰宅したようだ。ドタバタいうその大きな音から、パンパンに膨れ上がった大きなスポーツバックを壁やドアなどあちこちにぶつけている姿が目に見えかぶ。

「お兄ちゃん！」

お岩はそう呟いてその騒々しい物音のする方を見た。そして「だめだよ！こんな事したらお兄ちゃんが悲しむよ！インターネットに

書き込んだら、世界中の人が見るって先生も言ってたし、だめだよ！出来ないよ！私！」と悲鳴を上げた。

ふんわりと笑う恋音。

「お岩はやっぱいい子ね」

そう言つと恋音はお岩からケータイを取り上げ、ササッと画面を操作した。そして「これで貞子の情報は全て消えたわ。安心してね」と言つてケータイの画面をお岩に向けて見せた。

ケータイの画面は真っ白になっていた。無論貞子の写真も無くなっている。

「じゃあ、私、そろそろ帰るね」恋音はそう言つて腰を上げた。「私が持つて来たケーキがもし余ったら、お兄さんにも分けてあげてね」

「う、うん」お岩は恋音の顔を見ずに答えた。

恋音が帰るとお岩はベットに横になり、手帳のプリクラに写っている貞子をじつと見つめた。

そしていつしか深い眠りへと沈み込んで行つた。そこは夢さえも生息する事の出来ない、眠りの底だった。

（次回に続く 最終更新日11年09月11日）

## 第8回 遊園地

「岬にある公園だから、岬公園！素敵な名前じゃない？」  
「そのまんまじゃん」貞子とお岩は思ったが黙っていた。

12月のある日、貞子とお岩と恋音は遊園地に来た。

その遊園地は何時つぶれるかわからない代物だった。東京デイズ  
ニーランドへ何度も行った事があるという恋音を、汲み取り式のぼ  
つとん便所がある遊園地に連れて来るのは、貞子もお岩も恥ずかし  
かったが、恋音が「行きたい！」と強く希望したので仕方がない。

貞子もお岩も東京デイズニーランドへ行った事はなかったが、汲  
み取り式のぼつとん便所はないはずだと思っていた。もし東京デ  
イズニーランドに汲み取り式のぼつとん便所があつたら、貞子とお岩  
の抱いている夢が一つ粉々に砕かれた事になる。

便所の話とはかく、田舎の名物と言えば、豊かな自然とキレイ  
な空気しかないのだから致し方ない。

真っ白なコートを着た恋音みたいな美人と、一緒に歩けるのは貞  
子とお岩にとって嬉しい体験だった。すれ違う男の人の反応が違  
うのだ。みんな恋音に目を惹かれていた。

「いやらしい目でジロジロと恋音を見やがって！このロリコン共  
め！」とお岩は心の中で悪態をついた。

「OLのお姉さんみたい！」と貞子は恋音を憧れの眼差しで見  
ていた。

午前中は遊園地の中をぐるっと下回りして、お弁当を食べて、午  
後からアトラクションに乗る事にした。

遊園地は4つのコーナーに別れていた。

錆びた鉄道の臭いのする、アトラクションのコーナー。

死んだ魚の臭いのする、水族館のコーナー。

うんこの臭いのする、動物園のコーナー。

赤ちゃんが泣き叫び、ヤンママがヒスな金切り声を上げる、多目的広場のコーナー。

お昼は多目的広場の芝生にピクニックシートを敷き、恋音の手作りのお弁当を食べた。おにぎりサンドイッチだ。

「貞子とお岩に食べてもらいたくて、がんばってつくったのよ。沢山食べてね！」

「こんなにたくさんつくるの大変だったでしょ？」お湯も満足に沸かせないお岩が訊いた。

「そうねえ、健一がケガをした猫を連れて帰って来たので家族の一員が増えたの。だから家事が増えて、毎日が大変よ！さあ、今日はダイエツトも忘れて大食い大会よ！どう？おいしい？」恋音がおにぎりを一口食べた貞子に訊いた。

「……おふくろの味がする」

この貞子の返事に恋音は腹を抱えて笑い転げた。

貞子もお岩も大食いには自信があつたが、この日の大食い大会の優勝者は恋音だった。

食欲旺盛な育ち盛りの少女達はお腹一杯になると、恋音を真ん中に「川」の字になって芝生に寝転んだ。

We go to a party

And everyone turns to see

This beautiful lady

Is walking around with me

And then she asks me "Do I look all right?"

And I say "Yes, you look wonder

ful tonight”

「どうしたの？急に？」貞子が笑いながら訊く。

「だって、お腹一杯で、天気も良くて、ポカポカ温かくて、空気もさわやかで、こんなに幸せだと、つい歌いたくなるじゃない？」

「だけど英語の歌なんてスゴイね？」

「そうかな？カラオケじゃよく歌うのよ」

It's time to go home now

And I've got a aching head

So I give her the car keys

And she helps me to bed

And then I tell her

As I turn out the right

I say” My darling you were wonderful tonight

Oh, my darling, you were wonderful tonight”

この多目的広場には野外ステージが設置しており、そこでウルトラマンショーだかセーラームーンショーだかをやっているという話だった。お岩は仮面ライダーショーだかプリキュアショーだかを、小さい頃から見たいと願っていたが、一度も見た事はなかった。平日にショーを演るわけではないし、お岩は休日にしか来た事がないのに、一度も見れないのは何故だろう？

お岩は恋音が歌っているのはエリック・クラプトンの曲だと気付いていた。だが曲名を思い出す事がどうしても出来なかった。

午後からジェットコースターや観覧車やメリーゴーランドに乗っ

た。恋音が一番夢中になつてはしゃいでいた。

冬は日が暮れるのが早い。夕方、帰り際に三人は売店で記念にと、お揃いの指輪を買った（勿論安物のおもちゃだ）。「貞子とお岩と私の永遠に変わらぬ友情の証よ！」恋音の言葉が、貞子とお岩には照れ臭くて恥ずかしかったが、恋音は心の底から嬉しそうにしていた。そして、岬に沈む夕日に買ったばかりの指輪を透かして見ながら「岬にある公園だから、岬公園！本当に素敵ね！」と繰り返した。まるでこの世の見納めでもあるかのように。

（次回に続く 最終更新日11年04月01日）

## 第9回 クリスマス・プレゼント

12月24日、貞子は電車に乗り、ケンタッキーフライドチキンを3ピース買って来た。今月はお岩や恋音と遊園地に出掛けた為、お小遣いはピンチだったが、なんとか3ピース買う事が出来た。お父さんとお母さんと貞子の分だ。

クリスマスぐらい両親には仲良くして欲しかった。家族揃って仲良くおいしいものを食べれば何かいい事があるかもしれない。

お父さんとお母さんにも恋人時代や新婚時代があったはずだ。このケンタッキーフライドチキンを食べれば何か思い出してくれるかもしれない！

今日だけはいつものおたく青年の部屋で、マンガを読んで過ごす気にはなれなかった。それって最悪過ぎる！

恋音からメールで呼び出されたのは、冷え切ったケンタッキーフライドチキンの箱を見つめながら、そんな事を考えている時だった。恋音からのメールには「12月24日の午後6時にXXXX公園に来てね！クリスマス・プレゼントが用意してあるの！気に入ってくれるとうれしいな！」と書かれていた。

貞子はちよつと早いかな？と思いながら、ニコニコ顔でXXXX公園へと向った。

やっぱり、持つべきものは友達だよな。2学期になって恋音が転校してきて、恋音というカードがうちの陣営に一枚加わってくれただけで、クラスのパワーバランスというか勢力図が変わったもんな。1学期に比べたら、いじめの回数も減ったし！

それにしてもクリスマス・プレゼントだなんて、やっぱり恋音はいい子だな

公園にはやばそうな男子高校生が3、4人たむろしていた。貞子は高校生を避けながら恋音の姿をさがしたが、貞子が「こいつら慣

れてる！」と感じた時にはもう高校生に四方から取り囲まれていた。

高校生の一人がナイフをちらつかせながら、

「ホンマに来たで」

「おまえ、鈴木貞子け？」

「ネットの掲示板に書き込まれてるで！今読み上げたるさかいな！えー」鈴木貞子をレイプして下さい！終わったら火でも点けて燃やして井戸に捨てて下さい！」やて！」

高校生の一人がケータイの画面を貞子に向ける。

「お前、そーとー嫌われてんな？」

「ふつーこんな事、書かれへんで？」

「お！こいつ生意気にメンチ切つとるで！」

「お前ら死姦てした事あるけ？メチャメチャ気持ちええらしいで？」  
「ウゼーから、こいつ上半身だけ先に燃やしてもて、死姦したるか？」

「燃やしてもたら、もう上半身はいらんよな？」

「上半身だけ切断して先に捨ててしもうて、下半身だけ死姦したるか？」

「それサイコー！チョーウケル！」

「お前、わしらが楽しいジョーク言うと思う？なめとんのとちやうで！わしら言うとする事はマジでやるで！」

高校生の一人がオイルの缶を取り出す。辺りに危険な臭いが漂った。

「言うとかけど、わしら好きでこんな事やつとんのとちやうで？頼まれたさかい仕方の方やつとるんやで？」

「恨むんなら、ネットの掲示板に書き込んだ奴を恨めや！」

貞子はその場に座り込んで震える体を抱きしめていた。怖くて怖くて涙が止まらない。泣きたくないのに涙が勝手に溢れ出てきて止まらないのだ。同級生からいじめを受けても絶対に泣いた事はなかった。だが今回の相手は複数の男子高校生だ。当たり前の話だが貞



子と同年の小学生とでは迫力が違う。

「ひどいよ、恋音！これがクリスマス・プレゼントなの？ひどいよ、恋音！」

「ほな、そろそろいてこましたるか！」高校生の死刑宣告に貞子はビクッ！と体を震わせた。

その時「ぶひー！ー！！！」という声とドス！ドス！ドス！という足音が聞こえた。おたく青年が「ぶひー！ぶひー！ー！！！」と叫びながらカメラを武器にして高校生に殴りかかった。呆然自失の貞子は「うちの白馬の王子様が現れたのかな？」とぼんやり思った。

「なんや、このブタ！やろうちゅうんかいな！ええ度胸やないけ！」おたく青年は貞子に群がる高校生達を、カメラという鉄の塊を無茶苦茶に振り回して、追い散らしている。

「このブタ！ボコボコにしてもたれ！」と高校生の一人が言ったが、どうも本気ではないらしい。必死になっているおたく青年とは対照的に、ニヤニヤ笑いながら、近付いては離れ、離れては近付き、を繰り返している。鬼ごっここのようにで余裕たっぷりだ。

おたく青年は駆けつけた時こそ勢いはよかったが、日頃からの運動不足と慢性の肥満とで、早くもゼイゼイハアハアと息があがり動きが鈍くなっている。

「そういえば「ゾンビVSストリップー」という映画があったな、一体どんな内容なんだろう？」と貞子がぼんやり思ったその時、

「ぶひー！ー！！！」

「うわー！ー！！！」

おたく青年と高校生の一人が同時に絶叫した。もみ合った際にはずみでナイフがおたく青年の腹に突き刺さったのだ。

ナイフを持ち出していた高校生も本当に刺すつもりはなかったらしく、貞子の側に倒れ込んだおたく青年を見て、かなり驚いた。

「！！！！」これには貞子も驚いた。

「ぶ・・・ぶひ・・・」おたく青年は顔中脂汗だらけで虫の息だ。

「やばいで！これ、マジでやばいで！」

「逃げよ！逃げよ！とんずらや！」

高校生達は雲を散らす様に逃げて行つた。

「まさか死んじゃうの？！」貞子が叫んだ。

「ぶ・・・ぶひ・・・」

「死なないで！お願い！死なないで！」

貞子はおたく青年の腹に突き刺さっているナイフを引き抜こうとして、ギョツ！とした。

それは恋音のナイフだった。

少なくとも、恋音が持っていたのと同じ、柄の部分に美しい彫刻が施されたナイフだった。

この成り行きを公園の陰から顔面蒼白になって見ていた少女が居た。

お岩だ。

（次回に続く 最終更新日11年06月01日）

## 第10回 心中

お岩は胸騒ぎがして「まさか……ね？」と自分自身に疑問符を投げかけながら、念の為、12月24日の午後6時のXXXX公園に様子を見に来ていた。

お岩は公園から自宅へと向いながら、自分が今までいかに幸福で平和で自由な世界で暮らしていたかを知った。だが今やお岩は不幸と悪夢と罪人の世界に居た。もう戻れない。おたく青年は死んでしまった。書き込むボタンを押したとか押さなかったとかの問題ではない。自分は間違いなく恋音に加担したのだ。もうおたく青年は生き返らない。自分はもう一生罪人なのだ。もう今までの幸福で平和で自由な世界には二度と戻れないのだ。

途中でクリスマスを祝福する楽しい家族とすれ違った。両親に見守られた、幼い兄妹の無邪気な笑い声が重いハンマーのようにお岩の心を打った。

お岩は部屋に戻ると布団の中にもぐり込んだ。しばらくすると突然、お岩の母親が部屋に飛び込んで来た。

「お岩！警察の方がいらっしやってね、おかしい事を言うのよ」

お岩の心臓は真っ青になって縮み上がった。

「な、何？」

「武がね、姫恋音ちゃんと心中したって言うのよ。中学校の屋上から手をつないで飛び降りたんですって！おかしいでしょ？警察は何を言ってるのかしらね？」

心中？

「おかしいわよね？ね、そうよね？」

お兄ちゃんと恋音が心中？

「あ、そうだ！武といえば、あんたこないだお兄ちゃんのシュークリームを勝手に食べちゃったでしょ！ダメよ？今日はケーキも買っているけど、お兄ちゃんの分はちゃんと残してあげてね」

「・・・お母さん・・・何言ってるの・・・こんな時に・・・」

「だって、だって！武が、武が！」

「お母さん！しっかりして！」

お岩の母親はお岩から目をそらして虚空をしばらく見つめながらエプロンを両手で揉みしだいていたが、突然、ワッ！とその場に泣き崩れた。

武からのメールがお岩のケータイに残されていた。

FROM：武

TO：お岩

HEAD：無題

BODY：

恋音は妊娠している。

相手は父親だ。

恋音は父親を憎んではない。愛してる。

ただ子供を産みたかっただけ。

恋音をひとりには出来ない。

俺も恋音と一緒に死ぬ。

父と母をよろしく頼む。

おまえは生きろ！

さようなら。ありがとう

END：

「田中さん！田中さん！」と呼ぶ声が玄関の方から聞こえた。警察の人だろう。太くて安心感を与える大きな声だ。この声の持ち主が日本の平和と正義を守る為に、日夜この世の悪と戦っているのだろう。

「田中さん！大丈夫ですか？田中さん！」

警察官の声がお岩の鼓膜を震わせた。

（次回に続く 最終更新日11年04月01日）

## 第11回 夜

冬の寒さと夜の暗さが静寂をより深みのあるものへと謳い上げている、12月31日の夜8時にお岩は家を出た。玄関の脇には貞子が立っていた。お岩は何も言わずに歩き出した。貞子も黙ってお岩の後をついてきた。向かう先は恋音の家だ。

病院に運び込まれたおたく青年は幸い命に別状は無く、医師や看護師もビックリ！の驚異的なスピードで回復していった。貞子はお見舞いに訪れて、慣れない手付きでリングの皮をむいてあげたりした。ほどなく貞子の手は絆創膏だらけになった。

貞子の両親も揃ってお見舞いに訪れ、感謝の言葉を述べた。おたく青年が一人暮らしだと貞子から聞いた母親は、腕をふるって豪華な家庭料理を山盛りつくり、重箱にギッシリ詰め込んで持参した。おたく青年が助けてくれたと貞子から聞いた父親は「これから娘をよろしくお願いします」と言い深々と頭を下げた。おたく青年はひどく緊張し汗だくになりながら「ぶ、ぶひ！」と返事をした。

貞子は思わず笑った。

貞子とお岩は恋音の家の前まで来ると流石に躊躇した。貞子とお岩は恋音のパパに真実を確かめようとしていた。だが警察や病院で見掛けた恋音のパパはあまりにショックを受け衰弱していた。そんな大人の男の人に何を言えいいのだろうか？何を訊けばいいのだろうか？それでも恋音のパパに会わずにはいられなかった。

門灯は点いている。玄関の灯りも点いている。2階の窓にはカーテンがひかれているが灯りも点いている。

お岩が呼び鈴を押した。

返事はない。

次は貞子が呼び鈴を押した。

2階のカーテンがひかれている窓に人影が映らないかと、じっと見つめていたが変化はなかった。

3度目は貞子とお岩が同時に呼び鈴を押そうとした。揃って指を伸ばした時、恋音の家から突然猫が飛び出してきた。目が輝き生命力に溢れた俊敏な動きから、おばあちゃん猫のクロではないとわかる。若い三毛猫だ。門まで飛び出してくると、貞子とお岩の目の前で直角に向きを変え、暗闇の中へと走り去って行った。

貞子とお岩には「生まれ変わったら猫になりたいな」と言っていた恋音が願いを叶えて、走り去って行ったのではないかと思われた。

（次回に続く 最終更新日11年02月19日）

## 第12回 健一

貞子とお岩が諦めて家路についた頃、恋音の父親は椅子に座り頭を抱えて泣いていた。無論呼び鈴が2度鳴らされた事にも気付いていなかった。自身の考えに没頭していた。

彼は妻を亡くしてから男手一人で、慣れない子育てと過酷な仕事に無我夢中で向き合い、恋人をつくる暇さえ無かった。かといって金で女の体を買うには彼は生真面目過ぎた。

そんなある日、娘の恋音から父を求めてきた。夢の中の出来事かと思われた。娘の恋音は若くして死んだ彼の妻と見間違えるほど美しく成長していた。だがそれは夢の中の出来事ではなかった。その証拠に、唯一度の過ちと思いたかった彼とは裏腹に、恋音はその日以後毎夜父を求める様になった。まるでそれが父親として果たす当たり前の役割であるかの様に。それは悪夢だった。そして恋音は妊娠した。

父親はあらゆる社会的制裁の全てを受け入れるから、娘の恋音だけはどんな事があっても守ってやろうと決心した。恋音に一緒に病院に行つて中絶しようとするめるが、驚いた事に恋音は産んで育てたいと言う。

産みたい？

育てたい？

一体どうやって？

恋音自身が子供なのに学校はどうするんだ？

父親は恋音に何度も問うた。だが恋音は泣きながら「赤ちゃんを産んで育てたい！」の一点張りだった。まるでおもちゃ売り場の前で駄々をこねる子供の様に泣きじゃくる恋音。普段はあんなに理路整然と喋り、大人の様に立ち振る舞うのにまるで子供だ。否、子供なのだ。エリック・クラプトンを歌えるまで聴こうとも、家事を完



壁にこなそうとも、学校のテストで一番をとろうとも、インターネットを縦横無尽に使いこなそうとも、恋音は本物の子供なのだ。

「ふん！被害者面して泣いているのかい？」

恋音の父親が声のした方を振り向くと、ベットで寝ていた猫のク口が口を開いていた。

「血は争えないね！」

恋音の父親は驚愕し猫に問うた。

「お前は誰だ？！」

「わたしかい？わたしはお前の母親だよ！母親の声を忘れたとは言わせないよ！」

恋音の父親は驚きのあまり椅子から腰を浮かせ口をパクパクとさせた。

「お前が中学生の時にやりまくった母親だよ！」

猫はベットの上にむくりと起き上がった。

「血は争えないね！実の母親とやりまくったと思ったら、今度は実の娘とやりまくったのかい？！」

猫はベットから飛び降りた。

「お前は母親のわたしとやりまくったように、娘とやりまくったんだよ！」

猫は健一の方へと喋りながら近付いて来る。

「娘を殺したのはお前だよ！母親のわたしを殺したのもお前だよ！」

「違う！母さんは病気で死んだんだ！」

「そうさ！お前の赤ちゃんを中絶したのが原因で病気になって死んだんだよ！」

猫は一步一步近付いて来る。

「母さんの方から僕を求めてきたんじゃないか？！」

「どんな言い訳をしようと無駄だよ！お前は血のつながった母親を犯し、次に血のつながった娘を犯したんだよ！」

「違う！違うよ！」

健一は半狂乱になっていた。

「逃げようとしたって無駄だよ！猫は喋ったりなんかしないよ！にも関わらず、お前には猫の声が聞こえる！お前は頭がおかしくなっただよ！気が狂ったんだよ！」

健一はその場にうずくまり、震える手で両耳を塞いだ。

猫は大きな声で笑い出した。

無論、猫の大きな笑い声は健一にしか聞こえない。

しかしその猫の大きな笑い声は健一が死ぬ瞬間まで鳴り止む事はなかった。

「わたしの本当の名前はね、お前の良心だよ！」

（次回に続く 最終更新日11年02月10日）

## 第13回 ミケの物語・第1章

ミケはいつまでもご主人様のミケでいたかったです。

ミケは生まれた時からご主人様と一緒にでした。ミケの本当の母猫がどうなったのかも知りませんでした。また、特に知りたいとも思いませんでした。ミケにはご主人様がいたから幸せでした。ミケはいつまでもいつまでもご主人様と一緒に暮らしたかったです。

ミケのご主人様はいつも言っていました。

「何故会社の連中は俺の悪口ばかり言っていたのだろう？悪口さえ言われなければ、俺は仕事を辞めずに済んだのに！俺は有能で仕事はよく出来たのに！」

ご主人様！ご主人様！ミケは会社で働いた事はありませんが、会社は働く場所で、悪口を言う場所ではありませんよ！誰もご主人様の悪口を言っていないですよ！

「隣の家の連中が俺の悪口ばかり言っていてやがる！」

「俺は絶対に人の悪口なんか言わないぞ！それは人間が一番やっちゃいけない事なんだ！」

「だけど俺だつて人間だ！人の子だ！我慢にも限界があるぞ！」

「俺を怒らせたらどうなるか、目に物見せてやる！」

「俺が10年以上無職だからって、ナメてやがるんだ！俺はナメられてまで黙っているほど、人間が出来ちゃいないぞ！」

ご主人様！ご主人様！ミケは頭は悪いですが、耳は良いですよ！でも何にも聞こえませんよ！誰もご主人様の悪口を言っていないですよ！

ミケのご主人様は一日中エリック・クラブトンばかり聴いていました。食事とトイレとCDを入れ替える時以外はいつも万年床の中

でミケと一緒に寝ていました。

ミケのご主人様はエリック・クラプトンがロバート・ジョンソンの曲をカバーしたCDを欲しがっていました。そして溜息ばかりついていました。

「エリック・クラプトンにとって命とも言えるのが、1930年代に活躍した伝説的なブルースマンのロバート・ジョンソンなんだよ」「10代の頃からエリック・クラプトンにとって、ロバート・ジョンソンは心の支えであり続けたんだよ」

「そのロバート・ジョンソンの曲をエリック・クラプトンが60歳を過ぎてようやくカバーしたのが、2004年に発表された「ミー&Mr・ジョンソン」と2005年に発表された「セッションズ・フォー・ロバート・J」なんだよ」

ミケのご主人様は「ミー&Mr・ジョンソン」は持っていました。が「セッションズ・フォー・ロバート・J」は持っていませんでした。

ミケのご主人様は仕事を辞めてから、10年以上無職なのでCDも満足に買えないのでした。

ミケは、エリック・クラプトンにとってロバート・ジョンソンが心の支えなのなら、ミケのご主人様にとってはエリック・クラプトンが心の支えなのだと思います。

ミケのご主人様はパソコンでエリック・クラプトンのDVD「24ナイツ」も見ていました。

「この曲でエリック・クラプトンが俺に合図を送っているんだけど、何を言いたいのかわからないな」

「そうか！隣の家の連中が邪魔をしているんだ！エリック・クラプトンの合図を解読させまいとして、電波を送って邪魔をしているんだ！」

「隣の家の連中さえ居なければ、エリック・クラプトンの合図を解読出来るのに！」

「ご主人様！ご主人様！ミケはご主人様と一緒にこのDVDを何度も見ましたが、エリック・クラプトンはご主人様に合図なんか送っていませんよ！エリック・クラプトンは歌ってギターを弾いているだけですよ！」

ミケのご主人様が珍しくお風呂に入った夜、部屋に戻ってくると、  
「俺が風呂に入っている間に隣の家の連中が、俺の部屋に忍び込んで盗聴器を仕掛けやがった！」

「だけど、どこを捜しても見つからないな」隣の家の連中は最先端技術を駆使した、目に見えない盗聴器を仕掛けやがったんだ！」

「ご主人様！ご主人様！ミケはずっとこの部屋に居てましたが、誰も忍び込んでいませんよ！ミケは寝てばかりいますが、これだけは本当です！ミケを信じて下さい！」

「そうか！隣の家の連中の背後には組織が存在しているんだ！組織とぐるになって善良な一般市民をストークして苦しめているんだ！」

「インターネットで「組織」を検索したら、こんなに沢山ヒットしたぞ！」

「俺は戦わなければならない！誰かがやらなくちゃならないんだ！俺が組織を潰してやる！」

「ご主人様！ご主人様！組織なんて存在しませんよ！ご主人様が戦わなければならないのは「組織」ではなく「自分自身」なのですよ！」

髪の毛が逆立つのは猫だけではなかったのだと、ミケははじめて知りました。ミケのご主人様の髪の毛は完全に逆立っていました。  
「怒髪天を衝く」という言葉は本当だったのだと、ミケははじめて知りました。

隣の家の庭に「こそこそ悪口ばかり言っていないで、正々堂々と言

えよ！！！」と包丁を持って怒鳴り込むミケのご主人様。ミケのご主人様の老母が「止めとくれ！止めとくれ！」と泣きながらミケのご主人様にすがりついていました。けれどミケのご主人様は老母をひきずりながら、更に大声を張り上げて何やら喚き散らし、隣の家  
の雨戸を包丁を握り締めた拳で物凄い勢いで殴りはじめました。

ミケは生まれてはじめてご主人様の真怒に触れて、体が震えて止まりませんでした。

近所の方が通報したらしく、警察が来ました。

ミケのご主人様はパトカーに乗せられました。

そして、ミケのご主人様を乗せたままパトカーは走り出しました。

ミケは生まれてはじめて家を飛び出しました！

ミケのご主人様を返して下さい！

ミケのご主人様を連れて行かないで下さい！

ミケのご主人様は悪い人じゃありません！

ミケのご主人様を返して下さい！

けれどミケがどんなに駆けても、ご主人様を乗せて走り去るパトカーに、追いつく事は出来ませんでした。

（次回に続く 最終更新日11年07月17日）

## 第14回 ミケの物語・第2章

隣の家は空家でした。ミケが生まれるずっと以前は人が住んでいたのですが、ミケのご主人様のステレオの音が余りに大き過ぎるので、隣の家の若い奥さんがノイローゼになってしまい、泣く泣く引っ越して行ったそうです。

引っ越す際に、礼儀正しいお隣のご家族は「今までお世話になりました」とご挨拶に来られたのですが、ミケのご主人様は部屋に閉じこもったまま出て来なかったそうです。

ミケのご主人様はどこか遠くの専門的な病院に入院させられました。ミケのご主人様は「俺は病気じゃないぞ！」と叫んだそうですが、その病院に入院させられる人は、皆同じ事を言うのだそうです。

ミケのご主人様の老母は、一日中台所の椅子にぼんやりと座ったまま、夜になっても灯りを点けません。そして「…………昔はいい子だったのに…………どうしてあんな風に育ってしまったのかね…………」と小さく洩らしました。

ミケはご主人様が居なくなって寂しくて寂しくて堪りませんでした。ミケは居なくなったご主人様に会いたくて会いたくて堪りませんでした。ミケは生まれた時からずっとご主人様と一緒にいたのです。ミケはご主人様が居ないと、エリック・クラプトンを聴く事も出来ません。

ミケはご主人様の夢を見ました。

ミケのご主人様が帰って来て「ごめん、ごめん！エリック・クラプトンのCD「セシヨンズ・フォー・ロバート・J」を買いに、ちょっとそこまで出掛けてたんだよ」と言っミケを抱きしめてくれました。そしてミケとご主人様はいつまでもいつまでも幸せに暮

らしました。

夢から覚めた時、ミケはご主人様を捜しに行こうと決心しました。  
ミケの少女時代は終わりを告げたのです。

ミケは旅立ちます。

ミケの後姿を見て、ご主人様の老母が「いい子だから帰っておいで！いい子だから戻っておいで！」と言いました。けれどミケはもう振り返りませんでした。

家の外には一体どんな世界が待っているのかわかりません。けれど、ミケの物語はこれからはじまります。いつかまたどこかで皆さんとお会い出来たら、こんな嬉しい事はありません。

では、

お元気で、

さようなら

「スウィート・ホーム・シカゴ」

作詞・作曲 ロバート・ジョンソン

オー、ベイビー、行きたかないかい  
オー、ベイビー、戻りたかないかい  
黄金の地カリフォルニアに

俺のふるさと、懐かしのシカゴに

オー、ベイビー、行きたかないかい  
オー、ベイビー、戻りたかないかい  
黄金の地カリフォルニアに

俺のふるさと、懐かしのシカゴに



そう、1 たす1 は2

4 たす2 は6

重圧に押しつぶされそう、ベイビー

行くことにしてるんだ、もう行かなくちゃ

お願い、ベイビー

ハニー、戻りたかないかい

黄金の地カリフォルニアに

俺のふるさと、懐かしのシカゴに

そう、2 たす2 は4

4 たす2 は6

こんなところでもたましてたら

身ぐるみはがされちゃう

だからお願い、ベイビー

ハニー、戻りたかないかい

黄金の地カリフォルニアに

俺のふるさと、懐かしのシカゴに

そう、6 たす2 は8

8 たす2 は10

いいかい、おまえはあいつに一度だまされた

まただまされることになるよ

だからお願い、ヘイ、ヘイ

ベイビー、行きたかないかい

黄金の地カリフォルニアに

俺のふるさと、懐かしのシカゴに

俺はカリフォルニアへ行き

そこからアイオアのデモインへ

いつの日か誰かが教えてくれることになる

おまえが泣きながら俺の助けを乞うていると

ヘイ、ヘイ、ベイビー

戻りたかないかい

黄金の地カリフォルニアに

俺のふるさと、懐かしのシカゴに

(完 最終更新日11年08月07日)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3139o/>

---

少女時代

2011年9月11日03時10分発行